

PHILIPPINE EX.

2014



2014/03/01~03/10

~International Student Association~

《団長挨拶》

神戸支部 神戸松蔭女子大学2年
泉 祐花

私は今回このフィリピン Ex.で団長を務めさせていただきました。かねてから先輩たちに話を聞いていたフィリピン Ex.でまさか団長をすることになるとは全く考えていなかったのですが、突然団長を頼まれたときは、戸惑いと、自分では力不足なのではないかという不安ばかりがありました。実際、団長としての務めを果たせたとはいえませんが、Ex.が終わった今でも自分以外の人が団長をした方が良かったのではないかと考えています。私はもともと変に気負ってしまいがちで、自分で自分に課題を与えてしまうところがあり、そのせいで過剰にストレスを感じてしまっていたことも否めません。勝手に自分を追い詰めて病んでいくめんどくさいタイプということですね、はい。しかし、団長としてこの Ex.に参加したからこそ得られたものはたくさんあり、とてもいい経験をさせてもらったことは間違いありません。ここでは、そんな私の心境の変化を記していきたいと思います。

今回の参加人数は、15人。毎年50人近く参加する人気の Ex.とは思えない少なさです。さらに、メンバーもみんな割とぎゃーぎゃー騒ぐタイプではなかったので、最初はちゃんと仲良くなれるのかとても不安でした。案の定、最初はみんなぎこちなくて、オーガナイザーさんにも「今年はみんなとても静かだ。もっとクレイジーになれ」といわれる始末・・・私とは言うところ、団長という立場もあったので、私がみんなのパイプ役になって仲良くさせていかなければならないという変な使命感にかられつつも、それがうまくできないことで悶々と悩む日々を送っていました。しかし、それは要らぬ悩みだったようで、やはり2週間近く毎日行動を共にしていたこともあって、Ex.中にあるアクティビティをしていくうちにみんなは勝手に少しずつ打ち解け、それぞれが抱える悩みを聞いて支え合うようにまでなっていました。外国という自分たちの常識が通じない場所で同じ文化を持つ者としての強い仲間意識や安心感もあったと思います。今では、LINE でくだらないことを言い合ったり、誰かをいじったりするまで仲良くなりました。私はその LINE を見てにやけるわけですが、私が一番驚いたことは、最後に団長として日本人参加者の前で、日本語で挨拶した時に号泣してしまったことです。ファームでもシティでもお別れするとき1度も泣かなかったのに、私って冷徹やなーと思っていたのですが、挨拶をしていると自然に涙がぼろぼろでできました。涙を流しながら思ったことは、こんなにも日本人参加者のことが大好きになっていたのかということです。もちろんファームの子供たち、ホストマザー、ホストをしてくれた学生たちと別れるのはとても辛かったのですが、何より日本人参加者と別れるのが私にとって1番辛いことでした。それほどまでにみんなが大好きになっていたのです。

フィリピン Ex.に団長として参加していなかったら、ここまで楽しめなかったと思います。こんな私にチャンスを与えてくれた Ex.部長、支え続けてくれた同回や後輩、そして困っている時にいつも助けてくれたオーガナイザーさんには、こころから感謝したいです。このフィリピン Ex.で繋がった繋がりを私は忘れません。

《Ex.概要》

開催の目的

マニラやネグロス島の観光でフィリピンの歴史を、ファームとシティでの生活体験を通して、フィリピンの生活、文化、国民性などを学ぶ。また、フィリピンの学生との交流で相互理解を深める。

協力団体、協力者

Mr. Carlo Montano

Ms. Fritzchel Rellos

Ms Mardi Mapa

DMI Club in university of St. La Salle

場所

フィリピン共和国 マニラ市、ネグロス島

《参加者リスト》

神戸支部			
名前	学年	大学	役職
泉 祐花	2	神戸松蔭女子学院大学	団長
渡辺 宗太	1	甲南大学	文化紹介
松田 涼介	1	関西学院大学	国際渉外
佐藤 祐哉	1	関西学院大学	勉強会
吉久 励太	1	甲南大学	広報
田中 香奈	1	甲南大学	勉強会
種田 陽佳	1	関西学院大学	チケット係
小松 千華	1	甲南大学	財務
藤田 ゆきの	1	甲南大学	広報
大阪支部			
竹本 昌弘	2	関西大学	副団長
大橋 脩人	2	関西大学	副団長
城 見幸	1	関西大学	報告書
京都支部			
菱刈 真衣	1	同志社女子大学	SNS
岡山支部			
濱口 瞳	2	岡山大学	副団長
垣見 遥	1	ノートルダム清心女子大学	報告書

《Schedule》

日時	場所	宿泊先	活動内容
3月1日	Manila	Crown Regency Hotel	オリエンテーション、マニラ観光 SMモール
3月2日	Silay/EB Magalona	ファームステイ	ネグロス島へ移動、 ファーム生活体験
3月3日	Silay/EB Magalona	ファームステイ	ファーム生活体験
3月4日	Silay/EB Magalona	ファームステイ	小学校、高校訪問 ファーム生活体験
3月5日	Silay/EB Magalona	ファームステイ	ファーム生活体験 フェアウェルパーティー
3月6日	Bacolod	シティーステイ	ウェルカムランチ、大学見学 SMモール
3月7日	Bacolod	シティーステイ	ネグロス島ツアー、 ジョリビーでランチ
3月8日	Bacolod	シティーステイ	マカウオン島、ビーチ
3月9日	Bacolod	Go Hotel	ホストとの自由時間 フェアウェルパーティー
3月10日	Manila		閉会式、帰国

《事前勉強会報告》

日程 2月24日~2月25日

場所 平生記念セミナーハウス

2/24 11:00 平生セミナー集合
 11:30 企画開始*アイスブレイク
 13:00 昼休み
 14:00 文化紹介概要発表、練習
 16:00 勉強会課題発表 (プレゼンテーション)

2/25 09:00 団長から挨拶
 解散

課題テーマ 観光地、食・若者の文化、言語、気候、マナー・宗教、台風被害、貧富の差、お土産

上記のスケジュールで勉強会を開催しました。フィリピン Ex.参加者 15 名全員参加できました。企画で笑い合い、メンバーお互いを再認識し合うことができ、みんなの緊張がほぐれました。午後から、文化紹介のダンス「女々しくて (ゴールドンボンバー)」「恋するフォーチュンクッキー (AKB48)」をチームに分かれて、それぞれ練習しました。そのあと、勉強会の課題発表。それぞれが調べてきたテーマについて、発表し聞き合い、フィリピンの情報をお互いしっかり交換することができました。夜はみんなでピザを食べて親睦を深めたり、フィリピンの子供たちに教えてあげるために折り紙の練習をしたり、不安を解消するために情報交換したり、談笑したり、誕生日の子のお祝いをしたり、結団式以来、少しでも仲を深めたりお互いのことを知ることができた素敵な時間を設けることができました。

神戸支部 甲南大学 1 年
田中 香奈

《日別活動報告》

《Day1 3月1日》

大阪支部 関西大学 2 年
竹本 昌弘

一日目 三月一日に Ex.が開始された。最初は不安がとても大きかった。まず、フィリピンの料理私にはとても不味くこの生活にやっけていけるか不安だった。初日ということで、現地の人と自己紹介を交わしたのち観光に行った。観光では、フィリピンにおいての歴史の建造物を見学した。壮大な建物ばかりで今まで見たことのないもの素晴らしいものばかりだったがフィリピンの天候、暑さがそれを上回り早く涼しいところに行きたかった。ハロハロはカキゴウリみたいでおいしかったが量が多く途中でいらなくなった。正味、そんなに面白くなく、早く村に行きたかった。記憶に残っているとすれば、夜に宗太とデパートのスタバでコーヒーを飲んだことくらいであろう。あんまりそれまでは話すことなかったがその機会に仲良くなれたのではなかろうかと微かに思いにふけりながら報告書を完成させた。

《Day2 3月2日》

神戸支部 関西学院大学 1 年
種田 陽佳

プログラム 2 日目にあたる 3 月 2 日はマニラからバコロドへの移動日であった。9 時にホテルを出て空港へ向かい、バコロド行きの飛行機に乗った。フライトは約 80 分。空港に着いて、日本とは異なる日差しのきつさに驚き、空の青さに感動した。高い建物がないため、空が高く感じられた。車でレストランに移動し、昼食を食べる。メニューはチキンとライス。その後、車でファームへ移動。ファームへ着いて、チャーチでホストファミリーと初対面。家で衝撃的だったのが、やはりトイレと風呂であった。トイレは便器はあるが便座がなく、水も自分で手桶を使って流すものだった。風呂はトイレと同じ空間で、

トイレを流す水を手桶で汲んで水浴びをするという感じだった。最初は不便だと感じたがすぐ慣れたし、日本では経験できない体験だったと思う。一度それぞれの家へ荷物を置きにいった後、外に出て子どもたちと遊んだ。フィリピンの遊びや、前に来た日本人が教えたのであろう「はないちもんめ」をして遊んだ。途中、ホストシスターと一緒に串に刺したパンとフランクフルトをスナックとして食べた。子どもたちは日本人が来るのを本当に喜んでくれていた。私たちはずっと子どもと一緒にいて、遊んだり、話したりしていた。話の内容は、過去に来た日本人の話、フェイスブックの話、日本にいる私の家族の話、日本のアニメの話、洋楽の話が主だった。暗くなって家へ帰り、晩ご飯を食べた。メニューはチキンと川魚とライス。その後、日本から持ってきたお土産のひな人形、ふりかけを渡した。どちらもどういふものであるかを英語で説明するのが大変だった。ホストシスターとトランプで遊んで、21時には寝た。日本人二人用のために部屋を用意してくれて、そこに扇風機もあったので快適に寝ることができた。

《Day 3 3月3日》

神戸支部 関西学院大学1年

佐藤 祐哉

目が覚めて、一瞬自分がどこにいるのかわからなくなる。じっ、とまわりを見渡す。石造りの壁にかかる真紅のカーテン、異国めいた奇妙なカレンダー、そして険しい友人の寝顔。そうだった、ここはフィリピンのファームなんだ。僕らは昨日から Bacolod の Chiquita という村に滞在している。

ファームの朝は早い。眠たい目をこすりながらトライシクルで颯爽と風を切る。向かう先は広大なサトウキビ畑。仕事の手伝い...? いや、ただの体験学習やん。などという小粋なつつこみを挟みつつ、サトウキビをかじる。美味しい。

昼過ぎになり、これから近くの小学校に向かう。本来は明日の予定だったのだが、旅にハプニングはつきものということだろう。いざ、小学校へ!

小学校についてとこでまずは植林をさせていただく。何故か僕だけみんなと離れたところで木を植える。寂しい。でも何故か2本植える。嬉しい。次はなんだとわくわくしながら教室へ移動する。その瞬間、背中に無数の視線を感じる。そこには無数の子供たち。そう、これから行うのは日本の文化紹介。折り紙片手に、群がる子供たちに立ち向かっていくのだ。数分後、僕は戦慄していた。輝く眼に無邪気な笑顔、そこにいたのは紛れもなく「良い子」たちだった。僕のつたない教えにも素直に耳を傾け、時にはやさしくフォローまでしてくれる子供たちにすっかり魅了されてしまったのである。子供たちと一緒に大いに笑い、大いに遊んだ後で幸せな疲れを噛みしめつつ村への帰路に就く

神戸支部 甲南大学1年

吉久 励太

睡眠不足でむかえた朝、朝食を食べさとうきび畑へと向かった。そこで、さとうきびをかじらせてもらうという初めての経験ができた。手伝いをするつもりだったのだが、実際には農業体験をさしてもらったという感じで少し申し訳なかった。その後、家に帰ると、まだ昼前にもかかわらずご飯ができて驚いた。4時ごろから小学校を訪問し、折り紙を教えた。だが、僕は、教え方があまりうまくなかったよう

で、折り紙を折ることにはあまり興味をもってもらえなかったようで、途中でグラウンドに連れていかれ鬼ごっこがはじまった。そして、村にもどったあとまた鬼ごっこをし、この日は体力を使い、とても疲れた1日だった。この日村ですごしてわかったことは、一つ目は村の人たちはとてもあたたかい人たちですごくもてなしてくれるということ 二つ目はフィリピンの子供たちはとても可愛いということ。このふたつのことを感じた1日だった。

《Day 4 3月4日》

神戸支部 関西学院大学1年

松田 涼介

ファームステイ3日目となり、朝の早さにだんだんと慣れてきた。2日目などはとても辛かったのだが、体も村の生活に慣れてきた。朝食を食べたあと、7時からさとうきび畑に向かって作業をした。村の人たちは、気温の低い早朝から働くのだと知った。向かったさとうきび畑は、さとうきびが生え始めの時期だった。そこで僕たちがさせてもらった作業は、生え始めのさとうきびと雑草を見分けて、雑草だけを取り除くというものだった。中腰になり、鎌で雑草を抜く。とても単純だけどかなり辛いものであったし、また、見分けるのがとても難しかった。何本かさとうきびを抜いてしまう失敗もした。畑の一行するだけでも一苦労だったのだけれど、村の人たちは自分たちの3倍もの速さで雑草を抜き取っていった。途中、一本さとうきびを抜いてしまうミスもしていたけれど(笑)

また、さとうきび畑の他にも野菜を栽培している畑にも向かった。雑草が生い茂ったところをくぐったところに畑があった。そこでトマトやナスなどのいわゆる夏野菜を収穫した。3月なのに夏野菜の収穫なんてかなり新鮮な気分だった。

これらの農作業を終えて一度自分のホストの家に戻ると、いつものようにご飯がテーブルに置かれていた。時間は9時半。朝食と昼食の間のモーニングスナックというやつらしい。3日目にもなると、1日5食という生活にも慣れてきて食欲も湧くようになってきた。なんといっても料理がとてもおいしい。話を聞き想像していた時は、好き嫌いや見た目が少しアレで食べられないかもなどと思っていたけれど、全然違った。手で食べるという光景にはまだ違和感を覚えたままだが、料理はもしかすると日本よりも好きかもしれないと思うほどだった。

モーニングスナックを食べ終わると、水の配給があると呼ばれてカルロのもとに向かった。水をもらい、今後の動きについて聞いた後、雑談で時間をつぶした。おもしろすぎて腹が痛くなるほどでした。

おいしい昼食を食べ、14時から近くの高校に向かった。そこは生徒数が2000人を超える超マンモス校だった。僕がいた高校の3倍ほどの大きさである。そこでは生徒会の人たちの案内で校舎を見学させてもらった。文化紹介では日本の数字の読み方を教えたり、僕が一人で日本のダンスを踊らされたり(途中で宗太が助けに入ってくれた)されたが、わずかではあるけれど楽しく日本の文化を教えられたと思っている。それからみんなで下手くそなバレーをしたりして交流した。やはり英語は重要だなと再認識した。

村に戻ると1日の疲れがどっと来て、おいしいご飯を食べるとすぐに眠りにつきました。時間を気にしないという村での生活は日本と違ってかなり新鮮なものであり、また、のびのびと過ごせた良い体験でした。

神戸支部 甲南大学1年

小松千華

この日はファームステイ3日目。学校訪問の日でした！「朝7時に学校」と聞いていたので5時半起きで朝ごはん食べたり準備したりして、いつもの集合場所へ。しばーらくして同じ村のみんながそろい、まずは小学校に行きました。朝礼(?)みたいなものがあり、全校生が集まっていたのですが、隅っこにいた私たち日本人はガン見されていました。それが終わった後ハウキを渡され、グラウンダーの掃除をしました。子どもたちは授業を始め、私たちは最初、キンダークラスにお邪魔して自己紹介をしたり、日本のお菓子を配ったり、写真を撮ったりしました。たくさんのクラスを回ったのですが、途中でお菓子が足りるかどうかわくなくなったりもしました(笑)想像以上に子どもたちの人数が多くて本当に焦りました。でも、お菓子だけじゃなくてキーホルダーやペンなども配り、なんとか全クラス回り終えました。そして「何か日本の遊びを教えてほしい」と言われたので、はないちもんめをしたり折り紙を教えたりしました。子どもたちは興味津々でやっていて可愛かったです！午後からは高校に行って、1クラスにだけですが文化紹介として折り紙を教えました。英語で説明するのは難しかったけど、ちゃんと聞いてくれるしノリも良かったのですごく楽しかったです。

家に戻ってから、ホストシスターとホストマザーと川へ行って泳ぎました！水質はあまり良くなかったんで顔はつけられなかったけど、なんだか自然と一体になったような感覚でした。シャンプーなどを持って行っていたので、川辺に溜まっていたきれいな水で髪や体を洗い、その日のお風呂を終えました。夏なので冷たい水でも気持ち良かったです。

こんな感じでフィリピン Ex...4 日目が終わりました。

《Day 5 3月5日》

神戸支部 甲南大学1回

田中 香奈

ファームステイ4日目は、ファームでのラストナイトの日。4日目ともなると、ファーム生活にも慣れた。にわたりの鳴き声に起こされるのにも慣れた。私の居た村ではこの日、木を植えるなどの仕事の手伝いの予定が変更になり、日中自由時間だった。

朝から子供たちのダンスに改めて圧倒される。子供たちはダンスが本当にうまい！！ファームの2日目に私も教えてもらったが、子供たちは腰使いが神がかっていて、そして本当にかわいい。朝から癒された。

そのあと私は、棚に白いペンキで色を塗るお手伝いをさせてもらった。近所の人やペインターみんなに注目されながら、話をしながら、とても面白い体験をさせてもらった。

川に行った。ファーム2日目に連れて行ってもらった際には、さんざん嫌がっていたのに、この日はみんな川に入ってた。みんなはしゃぎまくり！そこでシャンプーをしだすメンバーも。私には彼女が現地人のように見えた。

そしてこの日は教会に行く日。子供たちが周りに座ってくれて、教会に行くのが初めてで、どうした

らいいか分からない私に、いろいろ教えてくれた。一緒に座った彼女たちは、英語が話せなかった。けれども、手をつないでくれたり、引っ張ってくれたり、ジェスチャーや表情で伝えてくれたり、目配せしてくれたり、本当にいろいろ教えてくれた。あと、儀式の間、私が退屈しないように、かまってくれた（笑）ありがとう。

夜はパーティー。フィリピンの曲にあわせて村のみんなでわちゃわちゃ、シャカシャカ、しっとり、ひたすら踊りまくった。メンバーたち、このパーティーで明日の別れを惜しんで号泣だった。あんなに無邪気で、生意気で、はしゃぎまくって、ひたすら笑顔な子供たちも泣いていた。泣きながら、笑いながら、素敵な素敵なパーティーナイトになった。この日の夜、私はファームでの4日間を振り返りながら、眠った。

神戸支部 甲南大学1年

渡辺宗太

いつもどおり朝6時に起床。トラック乗りを初体験して、颯爽な感じがした。そこで佐藤君がタオルを落として迷惑をかけたのは笑った。どっかに到着して、庭の手入れ、ペンキ塗り、砂浜にいつて貝殻あつめをした。庭の手入れといっても、花壇を作って、一人ひとりの名前を打ち込み、力仕事の大変さを改めて知ることができた。

昼に夜に行われるフェスのための文化紹介の練習のために村の人にロッジにつれていってもらい、そこで日本人全員でフォーチュンクッキーの練習をした。しかもその場所はなかなか快適で良かった。そして談笑もした。

そして18時に広場に行くとそこにカルロも来てフェスの開始。まずカルロがボイスパーカッションをかまし、私たちはフォーチュンクッキーをかまし、大いに盛り上がって楽しかった。そこで私たちはフィリピン Ex. で一番のテンションになっていたかもしれない。

そしてまたいつもどおり食べきれないほどの量の夜ご飯を出してもらい、そこから、1回男子全員でホストファーザーとビールを交わし、楽しく過ごせた。

《Day 6 3月6日》

神戸支部 甲南大学1年

藤田 ゆきの

フィリピン Ex.6 日目。この日はファームを去る日でした。昨日のダンスパーティーで散々泣いた私はもう泣かないだろうと思っていたのに、子ども達に教えたアルプス一万尺と一緒にやったりフィリピンの手遊びをして、また泣いてしまいました。泣いている私の涙をぬぐってくれる子どもの手は私より小さいはずなのに、しっかりしていて、とても力強くてあたたかい手でした。子ども達は想像力豊かで、元気で、なにより笑顔が素敵な子ばかりで本当に別れるのが寂しかったです。子ども達やママも泣いてくれることが嬉しいような悲しいような複雑な心境で、村を去った後の車の中でも私はずいぶん長い間泣いていました。

ラサール大学で久々に日本人メンバーが会えたのでテンションは上がりましたが、私のホストが仕事

のためにいなくて最初はすごく不安でした。けれど大学生達がとても歓迎してくれ、ゲームをしたり大学を見学したり、村と都市の違いを実感しました。その後私のホストがやっと迎えに来てくれ、家に行きました。1人で生活するのは不安でしたが、ホストの家族はすごく私のことを気遣ってくれるいい人達でした。みんな優しく、ファームとは違った面での日本やフィリピンの文化など、色々な話をすることができました。ただ、その後晩ご飯を食べるためホストの彼氏と私とホストでヘルメットなしでバイクに三人乗りした時は、朝とは違った意味で泣きそうになりました。

6日目はすごく喉が痛かったのですが、そんなことを忘れてしまうくらいのお会いや別れがあり、フィリピン人はやっぱり明るくダンスが大好きだと知れた日でもありました。

京都支部 同志社女子大学1年

菱刈 真衣

この日はファームのお別れの日でした。お世話になったホストファミリーやファームの子供たちとの別れは名残惜しく、涙のお別れでした。その後、シティで交流するラサール大学へと向かいました。途中は大気汚染がひどかったのがすごく印象に残っています。大学に着くと、すごく歓迎してくれて、とても嬉しかったです。食堂のような場所に移動して、自己紹介とアイスブレイキングのようなゲームをしました。昼食をとってから、ラサール大学内を見学した後は、近くのショッピングモールに行きました。ゲームセンターに行き、ゴーカートのようなアトラクション？で遊びました。このようにして、その日の活動は終わりました。そして、各自シティのホームステイ先に移動しました。ホストファミリーには2歳の女の子がいてすごく可愛かったです。ホストの Tonet の叔父さんが家に訪ねてきて、お喋りもしました。その人は過去に日本の関西の専門学校で英語を教えていたらしく、日本の話をしたり、日本の学生のことについて話したり、とても親切にしてもらいました。Tonet だけでなく、ホストファミリー全員がとても親切にしてくれて、感謝でいっぱいです。私はこのフィリピン Ex.を通して、国境を越えた人の優しさ、思いやりを感じる事が出来ました。

《Day7 3月7日》

岡山支部 岡山大学2年

濱口 瞳

ホームステイ2日目、朝ごはんを食べて学校へ出発。学校から家が遠かったので朝早くにトライシクルやジープニーを乗り継いで行きました。ジープニーでは、普通の道路なのに80km越えのスピードで走っててちょっとひやひやした一笑

この日は、ruinや教会などを見て回ったけど、ステイ先のめっちゃ近所で、朝早く起きたのに…笑って感じやったはず！笑

お昼は初ジョリビー！いろいろ楽しかった！その後はお土産ショップで買い物したりおそろいのボコラドTシャツを全員で購入したり笑

ホストのシーナは、陸上部の練習があるから午後から一緒におれんかったけど、フィリピンの学生たち

は陽気で話しやすかった！カラオケ？に行くって行って結局誰も歌わなかったけど、たくさん話せて楽しかったー！夜は、シーナの練習を見学してその後、シーナのチームメイトやコーチとやっとの晩ごはん♡

ここで、フィリピン来て初めて手でごはんを食べた！上手く食べれんし最初は違和感だらけやったけども。。笑 美味しくいただきました！

明日はビーチだあー！

岡山支部 ノートルダム清心女子大学1年

垣見 遙

シティー2日目。この日は朝6時半に起きて学校に向かった。朝起きると、既にホストは朝のシャワーを終えていて、生活習慣の違いを感じさせられた。この日も朝からマンゴーが食べられて幸せだった。

学校に着くと、既にバスに皆が集まっていて、日本人メンバーの顔をみると、どこか安心する自分がいた。そこからネグロスをツアーした。ホストや観光所のスタッフの方々がジョークを交えつつたくさん説明してくれるものの、自分の英語力が足りず十分に理解できなかったことが、残念で、申し訳なくて、悔しかった。お昼ご飯はジョリビー!!!フィリピンにはマクドナルドもあるけど、フィリピーノはジョリビーのほうが好きだと言っていた。皆が料理を待っている間に、ホストは私を連れて近くにマンゴーを買いに行ってくれた。これは違う種類のマンゴーで、醤油とお酢と塩をつけて食べた。味はなんとも言えなかったが、こんな感じでホストは私にひたすら尽くしてくれた。

学校に戻ってから、何組かでカラオケに行くと言って連れられたが、結局お酒を飲んで、ダーツをして、フィリピーノと喋って過ごした。私のホストはこの後テストがあったため、前回岡山 ST に参加してくれていた2人の先輩フィリピーノにカフェに連れて行ってもらい、1時間ほど懐かしい話をいっぱいした。プログラムを通じて二人と再会できて、本当に本当に幸せだった。その後いったんホストの家に帰り、たなかなのホストの家に皆で泊まった。ここで初日のホテル以来のシャワーに出会えて感動した。明日はビーチ!!なのに、遅くまで夜を楽しんだ！

《Day 8 3月8日》

大阪支部 関西大学2年

城 見幸

この日は朝起きて身支度をし、その後集合場所である学校に行くのかと思いきや、いつまでもたっても行く気配がない。するとホストが教会に行くと言い出した。そんな時間あるのかと思っただが、親睦を深めるためにもホストと一緒にいくことになった。そして朝からホストとホストの妹、そしてホストの友達と3人でホストの家近くの教会に出向いた。教会はそれほど大きくはないが、とても美しく、気分が落ち着いた。私たち日本人は多くが無宗教であるため、キリスト教信者であるホスト達を見ると、どうしてこれほどまでにイエス・キリストを神として崇め、信ずることができるのだろうと素朴な疑問があった。その近くには広場があり、そこでは多くの人がダンスをしていた。いわば日本のラジオ体操のようなものだ。さすがは音楽好きなフィリピン人

だけあって、ダンスも上手だった。その後、ホストの自宅近くの銀行の駐車場でしばらく待っていると皆を乗せたバスが来た。どうやら学校まで行くのは二度手間になるため、途中で合流することになっていたらしい。バスに乗り、ここからは風を切りながら、目的地のビーチに向かう。1時間程してバスが海岸に着いた。そこからボートに乗り継いで約20分かけて目的の島へ行く。島へ行く途中、海の色が深い青からエメラルドグリーンへと変わり、やがて透明の青いビーチが私たちを出迎えてくれた。ビーチに着いた途端私たちのテンションは一気に上がった。天候にも恵まれ、水着に着替えて、さっそく海へと走った。海の水は少し冷たくも感じたが、皆思い思いに楽しみ、そんなことすっかり気にならなくなった。海で騎馬戦をしたり、逆立ちをしたり、プカプカ浮いたり楽しい時間はあっという間に過ぎた。昼食はお馴染みのチキンとポーク、そしてライスだった。フィリピンに来てほぼ毎食食べているチキンであったが、晴れた日の海辺で食べるチキンはいつもよりおいしく感じた。そして、なんとこの日は我らが団長、祐花さんの誕生日だったので、サプライズでケーキとプレゼントを渡して、皆でお祝いをした。祐花さんもとっても喜んでくれて大成功だった。ケーキは切り分けて皆で食べた。チョコレートケーキで、日本のものよりも甘い気がした。みんな手づかみで、食べただけ食べた。そろそろ疲れも出始め、3時ごろビーチを離れ再びボートに乗ってネグロス島へと帰った。帰りのバスではみんな爆睡だった。

フィリピンには素晴らしい自然がたくさんあり、綺麗なビーチもその一つだと思う。あんなに綺麗な海で皆と楽しめたのは本当に最高の思い出だ。

《Day 9 3月9日》

大阪支部 関西大学2年

大橋 脩人

この日は、ステイ先最後の朝を迎え、朝食を食べてステイ先の家族と記念に集合写真を撮りました。ステイ先のドナをはじめ家族はとても優しく素晴らしい3日間を過ごすことができ、別れの時は本当に寂しかったです。特に、ドナの妹は最初距離をあけて私を見ていましたが、日を過ごすごとになじんでくれてもっとここにいたいなと思いました。

ステイ先の家族と別れホテルに移動した後、昼食を食べ、買い物をするなどのフリーな時間を過ごしました。その後、フェアウェルパーティーが行われる会場へ向かいました。そこで、私たちは少しパーティーで踊るダンスの練習をしました。勉強会以来踊っていなかったせいかな出来具合があまりよくなく正直やばいと思いました。

パーティーは、日本人、フィリピン人、日本人、フィリピン人の順番でダンスを踊ることになり、私は三番目に踊ることになりました。しかし、2番目に踊った学生のダンスがとてもうまく、その場が盛り上がると同時にハードルも上がり、次の番のダンス全然できてないと考えさらにやばいと思いました。私は踊る前に食事を挟みましたが食欲がなく、喉も渇くなどで正直どうしようかという危機感があったのを今でも覚えています。結果的にはその場の雰囲気負けずになんとか無事に踊り終えて本当に良かったです。

ダンスが終わった後、一人一人ステイ先の学生にメッセージを送るなどの別れのムードになりました。

私はこの時に学生とも別れ、Ex. がもう終わってしまうのかと実感が湧きとても寂しくなりました。

私はイメージしてた以上に優しくて明るい学生たちと出会えて本当に良かったです。

また、再会しようと約束などもでき本当に幸せでした。

そして学生と別れ、ホテルに戻り Ex. 最後の夜を過ごしました。

《Day10 3月10日》

神戸支部 神戸松蔭女子大学2年

泉 祐花

最終日は、早朝にはホテルをチェックアウトして、空港に向かいました。その後、レストランで昼食をとりつつ、この10日間をみんなで振り返りました。それぞれがこの Ex. で学んだことや経験したことなどをみんなの前で発表するのですが、なんせ空港の、しかもレストランということで、声が全く聞こえないんですね笑 まあそれぞれがちゃんとこのプログラムでいろんなことを学んだり経験したという事実は確認できたので、いいでしょう笑 マーリーさんが「最後に団長としてみんなに挨拶して。日本語でいいから。」といわれたので、いろいろ振り返りながら話したのですが、冒頭の団長挨拶で書いたようにまあボロ泣きしました笑 さらにその後ずっと私たちのお世話をしてくれていたカルロが挨拶したので、涙腺が爆発して涙がとまりませんでした。カルロは私が困っているときにいつも助けてくれた私のヒーローだったので、彼の言葉ひとつひとつが胸にしみました。

アフターに行く人と日本に帰る人で飛行機の時間が違ったので、日本でまた集まることを約束してバラバラとみんなとお別れしました。

この10日間は、短いようでとても長かったと私は感じました。それは、まるで1ヶ月くらい滞在したと思えるほど本当に濃い日々だったからです。こんな短い期間の中でただの旅行では経験することのできないことをたくさん経験させてくれた、このプログラムに関わる全ての人に心から感謝したいです。

ちなみに私事ではありますが、この日みんなと別れてアフターに行くための飛行機を待っている時、トイレで iPhone を落として画面がバキバキに割れました。さよなら私の iPhone。

《フリーテーマエッセイ》

「固定概念と偏見」

神戸支部 神戸松蔭女子大学2年

泉 祐花

私は、フィリピン Ex. を通して、自分がフィリピンについて勝手な思い違いをしていたことを知りました。ここではそのことについて書きたいと思います。

フィリピンといえば格差が問題となっています。フィリピンのことをよく知らなかった私がフィリピ

ン Ex.に参加したのは、この貧富の差というのが実際どういうものなのか確かめに行くためでもありました。参加する前のイメージでは、今回のプログラムでも滞在したファームとシティでも貧富の差が歴然とあると思っていたのですが、実際にホームステイをしながら何日も滞在してみると、意外にもそんなに差はないことに気づきました。

例えば、お風呂とトイレ。私がファームステイをしていて1番驚いたのは、桶から水をすくう方式のお風呂とトイレでした。シティに行って、やっとシャワーや自動の水洗トイレになると思っていたのですが、シティのお風呂もトイレもファームとほぼ変わらなくて、落胆した思い出があります。他にも、ファームは電気が通ってなくて太陽に合わせた生活を送っていると思っていたのですが、夜中までちゃんと電気が通っていましたし、DVDもありましたし、扇風機もありましたし、意外と電化製品が充実していたことにも驚きました。まさかファームで今話題の「アナと雪の女王」のDVDを見ることになるとは思いませんでした笑

このように、私は「フィリピンは格差社会がひどい」という固定概念から、フィリピンの貧しさに偏見をもっていました。もちろん、今回のプログラム中に訪問したり滞在した場所だけでは、フィリピンの格差社会の実情の全てを把握しきれぬわけではありません。しかし、一片だけでも知り、私の中のイメージでしかなかったフィリピンが現実味をおびたことは、かけがえのない経験だったと言えます。

そして、何よりの偏見は貧しいことが不幸だという考えです。日本に比べると貧しい生活でも、フィリピンの人々は笑顔が絶えません。「台風で大きな被害にあってもフィリピン人は笑顔が絶えることはなかった。」というオーガナイザーさんの話を聞いて、フィリピンは素晴らしい文化を持っているなどという尊敬の念と同時に、私はなんてくだらない勘違いをしていたのだと恥ずかしくなりました。生きる活力に満ち溢れている彼らに見習うところは日本人にはたくさんあるということをこの Ex.で学びました。

「フィリピンの食文化と国民性と気付いた事」

神戸支部 甲南大学1年

渡辺宗太

私はこのフィリピン Ex.が最初のフィリピン渡航だった。フィリピンに着くと、フィリピンらしいはじめじめとした雰囲気を感じずにはいられなかった。フィリピンの食文化について、フィリピンではとにかく肉、肉、肉だった。野菜系があんまりなく、こってりとした濃い味のチキンやポーク等が主流だった。日本では食事をする前に、感謝を込めて食す前に「いただきます」と言うのが普通ではあるがフィリピンではフィリピン人のほとんどがキリスト教であるため、額・胸・左肩・右肩に1回ずつ指をあて何かを発した後に「アーメン」と言うのがフィリピンだ。フィリピンでは、当然お箸がないのでなんと手でごはんを食べるのだ。これにはなかなか驚いた。試しに私もチャレンジしてみたが、ごはんがこぼれて食べづらかった。

国民性について、フィリピン人はとにかく陽気で初対面にも関わらず、まるで親友のように接してくるので日本人にはない良さがあった。フィリピン人はとても他人に親切で、それはどうしてなのか聞いてみると、フィリピン人は先述通りほとんどがキリスト教徒なので、キリスト教の教えで他人のために

尽くすことが天国に行く条件だと言われている。そして感情を全面的に公の場でも出すところも日本人が学ぶべきことだと思う。

私はこのフィリピン Ex.を通して、さまざまなカルチャーショックを受けた。ファームではサトウキビ畑を耕すために、村全体が一致団結しているところや、シティでは大学生がみんなフレンドリーであること。すべて日本にはない、そして日本いや私たちが学ぶべきことだと思った。こうした異文化を知ること日本にただでいるだけではわからないよそこから見る日本を再認識するという点でも今回知ることができずごく貴重な経験ができた。

「まっただの感想」

神戸支部 関西学院大学1年

松田 涼介

三月の一週目に Ex...プログラムでフィリピンに行ってきた。僕が海外に行ったのはこれが初めてだったので、かなりの不安があった。食文化、衛生面、人柄、コミュニケーション、などなど。不安要素はいくらでも数えられるほどあり、飛行機で向かっている最中も不安だった。僕は他のメンバー数人とビフォアとしてフィリピンにプログラム前についていた。色々な観光地を回ったりした。けれどその期間で一番充実していたことは、ビフォア最終日で向かったギター工場だった。そこで働いている人は日本語が話せる人で、英語では伝わりづらかったフィリピンの文化や習慣、日本との違いや日本のイメージなどを細かく教えてもらえた。そんなこんなで不安は若干拭い去ることができてからプログラムがスタートした。印象深く残っているのは、ファームでの生活だった。ファームでの生活は日本にいたら絶対に体験できないものだった。一日五食、風呂やシャワーはなく、水を浴びることで体を洗い、時間が止まっているように感じるほどゆったりした一日。とても人柄のよい人ばかりで、お世話していただいたり、楽しませてもらったり。百聞は一見に如かず。ここでどれだけ書こうが、実際に行って感じないと分からないものをたくさん体験してきた。奇跡的にも僕が酷く嫌っている虫は一匹も出てこなかったのもとても幸せだった。

シティでの生活はファームとは比べものにならないほど時間の流れが速く、どこか日本のようなものを感じた。それでも文化はかなり違って、交通なんかがとても危険だった。どの車も平気に警音器を鳴らし、横断者は車の間を縫っていくようにして渡っていく。何度車にひかれそうになったことか。あ、軽い接触しました。肩、ぶつかりました。痛かったです。ホストの学生とは一緒に行動してよく遊んだ。拙い英語でもしっかり理解してくれて、とても助かった。けれども、自分の英語力がまだまだなんだと実感した。

よく外国に行くと人生観が変わると言うが、そんなには変わらなかった。けれども、色々見聞きし、感じ、体験し、勉強できた。全てを吸収できたかは分からないが、それでもフィリピンを訪れる前の自分とは少し変わっていると願いたい。またフィリピンに行きたいと思う。ただしそれは、またフィリピンの友達に会いたいという理由だけではなく、プログラム中には見ることでできなかった新しい一面を見たいからという理由が大きい。また機会があったら今度は自分で計画を練り旅

立ちたいと思う。

「幸せな家庭の作り方」

神戸支部 関西学院大学1年
佐藤 祐哉

これから行う話は単なる私のエゴイズムかもしれませんが、幸せの定義は千差万別で、ましてや幸せの作り方なんてものは誰もが違う形で持っているものです。それをふまえた上で言いますと、私の幸せの形の1つは「暖かな家族」であり、それを形作る要因として「笑顔」と「自然」が挙げられます。

私がフィリピンに2週間ほど滞在した中で2つの家族と交流を持ちました。親交を深める中で様々なことを感じ、新鮮な刺激を受けてきましたが、その中でも特に印象に残っていることがあります。それは、家族の絆が強いということです。彼らは自分の家庭だけでなく、その親類間でのつながりも大事にしているように思われました。ファームでのステイ先でもシティでのステイ先でも親族全てで子供を育てるような環境がありました。私の目には、それがとても素敵なものに映りました。

また、彼らの多くは自然に触れながら育っているように思われます。ファームでは動物と共に暮らし、シティにおいても一歩街を抜け出せば穏やかな環境が広がっています。小さいころから自然の中で遊び、生活することがフィリピンの子供たちの無邪気で純粋な笑顔を生み出しているのではないのでしょうか。

近代化していくことは悪いことではありません。便利な暮らしを追及することに意義を唱えるつもりもありません。ただ、生活環境の発展に家族の絆が弱くなり自然を破壊することを当然とみなすことには声を大にして異議を唱えます。私は、現状のフィリピンを以前の発展途上国としての日本ではないかと考えます。ですので、今のフィリピンにあって日本にないものは、昔日本にあったものであり、これから先フィリピンから失われていく可能性のあるものなのです。どうしたらフィリピンの幸せな家庭の作り方を現状の日本に適応させることができるか、また、どうしたらこれから先のフィリピンでそれを失わずにすむのか。これらの考えを深めることは私がフィリピン Ex.に参加した意義であり、責務とも呼べるでしょう。いつの日か私自身が幸せな家庭を築くことができるように、そのためのヒントを多く得られた今回のフィリピン Ex.に参加できたことを嬉しく思います。

「フィリピンの文化と国民性」

神戸支部 甲南大学1年
吉久 励太

フィリピンの文化は日本と違うところが多かった。まず村での食事回数が1日6回ほどととても多かった。食事は、野菜はあまりなくチキンが多かった。少なくとも1日1回は必ずチキンを食べていた。トイレは風呂場と一緒に、トイレはボタンを押して流れるわけではなく、自分で水をかけて流さなければ

ならないのでなかなか流れない。風呂は湯船につかるわけではなく水をかけて流す程度。もちろんお湯ではない。スポーツは、フィリピンではバスケが人気なようで村にはコートがあり、みんなとてもうまかった。

このフィリピン Ex. で出会った人はみなあたたかく、とても親切な人達ばかりだった。フィリピンの方と生活を共にすることで文化や人柄にふれることができ、とても貴重な体験をすることができた。

「フィリピン Ex. を終えて」

神戸支部 甲南大学 1 回

田中 香奈

フィリピン Ex. で私が得たものは本当にたくさんあります。

ファームでの生活。初めて知ることがとてもたくさんあって、いろいろなことに圧倒されました。トイレやお風呂に戸惑ったのは勿論のこと、ごみを地面にポイ捨てすることには、本当に驚きました。そして子供たち。何をやってもキラキラの笑顔に向けて、笑ってくれる彼ら。私の下手くそな英語の発音を直して教えてくれる彼ら。幼いのに私の面倒を見てくれるマイシスターズ。本当にありがたかったです。そして、村にはもちろん全く英語が通じない子もいました。英語が通じなくても、表情と行動と、ジェスチャーで心が通じるんだということが分かりました。笑顔ってとっても大切で素敵なものだなと感じました。

シティーでの生活。大学生たちがスラスラ話す英語に、ついていくのが大変だった私に、パートナーはゆっくり話してくれたり、かみ砕いて説明してくれたり、とにかく理解しようとしてくれて、すごく彼女の優しさに助けられました。

初日のマニラでは、英語が全然聞き取れず話すことにもビビっていた私が、ファームでリアクションや第一声が英語になって、短い文や日常的な簡単なことを英語で話し、英語でコミュニケーションを取ることが慣れることができたので、パートナーの助けもありシティーで大学生と内容のある深い話をすることができました。とにかく、簡単な自分の知っている単語をつなげて、すぐに反応を返せるようになって、英語を話すことがこんなにも楽しいと初めて感じました。もっともっと英語を勉強しようとも思いました。

フィリピンでは、ダンスもたくさん踊ったし、走り回ったし、大きな口を開けて笑いまくったし、本当に楽しかったです。そして、私はもっとたくさんの人と交流したいし、たくさんの景色をみたいと思うようになりました。素敵な笑顔、素敵な経験、素敵な景色、素敵な人、素敵な思い出、たくさんの素敵を得ることができました。そして、ファームで大変な生活を共に過ごし、シティーで協力しあい、一緒に笑い合いあって、最高のメンバーに出会うことができました。このフィリピン Ex. を終えて得たものは本当に多いです。

「フィリピンで考えたこと」

大阪支部 関西学院大学2年

種田陽佳

私は今回、フィリピン Ex.に参加してよかったと心から思う。普通の旅行なら経験できないことをたくさん経験できた。このエッセイでは、その貴重な経験の中で考えたことを書く。

私がフィリピンで考えたことは、教育の大切さである。この教育とは、学校教育だけではなく、人々に伝えること全般を指す。特に思ったのは環境について、フィリピンの環境問題は深刻だと感じた。特に、水質汚染が印象的だった。というのも、実際に川に入ってその汚さに驚いたし、自分自身も水を汚したからだ。ファームでは、下水設備が整っていない家から生活排水がそのまま外の地面に流れていたり、川のほとりで石けんを使って水浴びをしていたりした（私もシャンプーやボディソープをそこで使った）。その水は全て川に行き着くのだろうと思う。その川で子どもたちは水遊びをし、その川で捕れる魚を食べるのだ。今は大きな健康被害は出ていないようだが、このままの生活を続けているといつか大変な被害が出てしまうのではないかと思う。このような状況になっているのは、村人が何も知らないからなのではないかと私は考える。自分たちの行動が水を汚しているということ、その汚れた水を摂取すると健康に悪いということなどだ。実際、高度経済成長期の日本はそのような状態であった。なので、フィリピンの人々に先に深刻な環境汚染を経験した日本人として、様々なことを伝えたいと思った。先進国は発展途上国にアドバイスをたくさんする必要がある。

このほかにも、考えさせることはたくさんあった。この貴重な機会を今後自分のため、そしてフィリピンの人のために生かしたい。

「フィリピンと日本」

神戸支部 甲南大学1年

小松千華

私は今回のプログラムで初めてフィリピンへ行き、たくさんの驚きと興奮、そしてたまに恐怖を感じました。そして、現地で感じたこれらの感情はフィリピンと日本の違いから生まれたものだと気づきました。

まずは交通に関してですが、もう、とにかく怖かったです。車線なんて関係なし、交差点や横断歩道でも信号機なんてほぼ存在しません。自由に車が行き交う中、現地の人でも自由に道を横切っていくので轢かれられないのが不思議なくらいでした。運転手さんにしたら、後部座席でわーわー言っていた私たち日本人はすごくうるさかったでしょうね。

次に、小学生ほどの小さな子どもたちでさえ英語がペラペラなことに驚きました。現地では、子どもたちにも大学生たちにもよく「なんで日本人は英語がしゃべれないの？」と聞かれたりもしました。そのとき、日本の英語教育って何なのかなとか、一応自分も幼稚園の時から英語に触れる機会はあったのに情けないな、とかいろいろ考えました。

最後に、私が最も強く感じたことはフィリピンの人たちはみんなフレンドリーすぎる、ということです。初対面でいきなりふざけてきたり冗談を言ったりする人、何にもしなくても近くに寄ってきたり手をつないだりしてくれた子どもたち、名前もわからないけど毎日あいさつとか声をかけてくれた村の人たち、なんでも気にかけてくれてすごく親身になってくれた大学生たち、ネームプレートを見て名前を呼んで「可愛い名前ね。」と言ってくれた空港の身体検査のところにお姉さん、いろんな乗り物の運転手さんなどなど、日本だったらこんなにたくさんの人と触れ合うことはないだろうなと思いつつ過ごしました。

このフィリピン Ex.で得たすべての経験や気持ちは、一生の財産として残るものだと確信しています。そして発見した悔しさはそのままにせず、自分を変えていく糧として成長していきたいです。心の底から、参加して本当によかったと思っています。

「フィリピン Ex.に参加して」

神戸支部 甲南大学 1年

藤田 ゆきの

私は両親と壮絶な喧嘩をしてまでフィリピン Ex.に参加しました。フィリピンは発展途上国で台風を受けた地域での復興の遅れや治安問題など様々な問題がある国です。けれど日本にはない人々の明るい性格などを知ることが出来ました。

もともと発展途上国に行って現地での生活をしてみたかったので、ファームでの生活は新鮮で楽しいものでした。いつもハイテンションで元気な子ども達といると本当に楽しくて、時間などを一切気にしない生活は日本では絶対に体験できないものだと思います。ただそこで気になったのは子ども達がゴミをポイ捨てすることや、生活用水がそのまま流れている川があること、動物と人間との距離が近すぎることで、子どもが常にお菓子を食べて歩いていることなどです。実際に私も洗濯し、洗剤が入った水をそのまま地面に流したり、ゴミをポイ捨てしたりしました。ただ子どもにポイ捨てをしたらダメと言ったところで解決方法を提示することができないのが、悲しかったです。料理を手で食べることがフィリピンの文化であるようにそれらは普通なこと、ただ改善方法押し付けるのではなく、文化を残しながら環境や衛生面をよくするのは難しいことだと思います。

またシティでは貧富の差を身をもって感じました。私のホスト先はあまり裕福ではなかったのですが、友達のホスト先の家は車を持っていたり、家が大きかったりとその差は歴然としたものでした。もちろんホスト先の家族は本当に素敵な人達でしたが、家の付近はスラムのような状態でドブ水にゴミが捨ててあり異臭を放っていました。初めてその光景を目にした時は思わず、そのゴミ中に日本のメーカーがないことを祈りました。このようにフィリピンでは環境、衛生に対してあまり配慮されていないのが現状です。

本当に悲しい話ではあるのですが、私がファームでお世話になった家の男の子は私が帰国して一か月もたたない内に亡くなったそうです。彼はまだ小学校にも通っていなかったのに、英語で会話はできませんでしたが、ダンスが上手で恥ずかしがり屋で笑うとかわいい子でした。日本でもかかると大変な病

気にかかり、不幸なことに亡くなってしまいました。医療、環境、衛生、などと軽々しく口にはするものの命が関わっている重く大切なことであると学びました。

フィリピンに行って私は文化交流という面では本当にすばらしい体験ができたと思います。けれども様々な問題を直視し、ごみ問題などが日本にもあることを再認識しました。ただ単に楽しかったのではなく様々な分野に興味を持てたのでフィリピン Ex.に参加してよかったと思います。

「異文化の地で得たこと」

大阪支部 関西大学 2年

竹本 昌弘

Ex.で一番楽しかったのは二日目くらいから開始された村での生活だった。子供たちはホンマに元気でとても可愛かった。村ではいろんな文化や食べ物を食べさせてもらいいい経験になった。トイレとかは環境性にやや問題ありで正直きついと思っていたが、日をたつに連れて気にならなくなった。風呂は基本的に存在しておらず、井戸の水をくみ上げ浴びるだけといったシンプルなものだった。貴重な体験ができた。農業体験や川遊びなど学校などでの子供たちと遊んだことなど一生の思い出である。ぜひ、またフィリピンに行きたい。シティーの方でもハーフの大学生に当たり、日本語でいいというラッキーなことにやりやすかった。食事なども気を遣っていただき、フィリピンの米ではなく日本の米を食べさせてもらった。本当にありがたかった。環境も抜群に良く快適であった。大学の授業にもぐったりいろんなことをした。ホストの方にいろんな人を紹介してもらった。そんな短時間で仲良くなれないがよかった。いろんなどこに連れて行ってもらい楽しかった。クラブをハシゴすると言ってリアルにきついなーと思ったが予想以上に楽しむことができよかった。フィリピン Ex.は最高なものだった。

「Ex.前と Ex.後の意識の変化」

大阪支部 関西大学 2年

大橋 脩人

まず、私は高校の時にシンガポール、インドネシア、マレーシアなどの東南アジアに行ったことがある理由と友達に誘われた理由でフィリピン Ex.に応募しました。初めは、治安の悪さ、病気などを知り不安でしたが、このフィリピン Ex.でとても貴重な体験をすることができ参加してよかったです。

マニラでは主に観光などがメインでしたが、現地の人と交流するなどの初めての経験をしました。私は英語があまり話せず悪戦苦闘し、もっと英語を勉強したらよかったと思いましたが楽しく話せてよかったです。また、料理は最初大丈夫かなと心配していましたが、とてもおいしかったです。

次に、バコロドでのファームステイでの3日間では本当に素晴らしい思い出ができました。私は、最近子供と触れ合う機会がなかったのでファームの子供たちと遊び、日にち時間などを忘れるくらい楽し

い時間を過ごせました。また、畑仕事や小学校、高校などに行って折り紙を教えるなどの体験をすることもできました。ファームの家族も優しい人で、本当に幸せな時間を過ごすことができ、別れの時は寂しさが込みあがり泣いてしまいました。

シテイステイでは大学生と交流し、ここではファームとはまた違う体験をしました。現地の大学生は明るい人たちばかりでまるで日本の学生と同じだと思いました。私はステイ先の学生と日本とフィリピンの文化の違いなどを聞いたり話したりして、お互いの文化をきちんと知ることができて良いなと思いました。私は Ex. でなかなかできない体験をすることができ本当に楽しかったです。

Ex. 始まる前は、正直何も考えない日々を過ごしていました。しかし、帰国後、私は現地の人と交流したりいろんな体験をしたりしていろんなことを考えるようになりました。特に考えたことは、いろんな人と直接交流できる場に参加したいという気持ちがでてきたことです。私はどちらかということのような場に参加するのが苦手でほとんど避けていましたが、今は人と交流して話を聞いたり話したりしたいなという意識がでてきました。また、今後新たなことに挑戦しようとも考えるようになりました。

Ex. はただ単に楽しかったと思うのではなく、今後の自分に必要なことやしなければいけないことなどを学ぶことができました。Ex. 前と Ex. 後でいろいろと考えたり、意識したりすることができてよかったです。私は Ex. を機にこれから学生生活を良いように過ごしたいです。

最後に、フィリピン Ex. に関わって下さった方々には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私は Ex. で出会った方々のことを忘れることはありません。本当にありがとうございました。

「日本との生活の違い」

大阪支部 関西大学 2 年
城 見幸

私は生まれた時から日本という素晴らしく発展した国で生活してきた。そんな中で、こうして不自由なく暮らせることに感謝しろと言われても、正直心の底から感謝できるほどではなかった。しかし、今回のフィリピンでの 2 週間の滞在の中で、私たちの暮らしとは大きく違った生活スタイルを体験することができた。特にファームでの生活は、本当に驚きの連続だった。

まず、初めてステイ先の家を見たとき、それは木で囲われた手造り感あふれるもので、想像以上に素朴で小さい家だった。しかし、家の中は思いのほか広く、生活できる空間が十分にあった。次に驚いたのはお風呂だ。フィリピンでのお風呂は、汲んできた水をバケツに溜めて、それを桶ですくって流すというものだった。私たち日本人はお風呂にゆっくり浸かって、一日の疲れを癒す習慣がある。それとは逆に、フィリピン人はわずか数分でお風呂を済ませてしまう。ここに文化の違いが顕著に表れている。その他、テレビやパソコンが家にあり、普通にテレビ番組が見れてしまうことは予想外だった。調理は炭で火をおこして、ライスも当然窯炊きだった。周りを見渡す限り畑ばかりで、大きな建物は一つもない。時間の流れはとてもゆっくりで、日本での暮らしとはかけ離れていた。

村には多くの子どもがいた。最近では日本の子ども達の間ですっかり定着してしまったゲーム

機なども、当然ファームにはなかった。子どもたちはいつの間にか大勢で集まって、近くの広場でバスケットボールをしたり、鬼ごっこをしていた。そんな光景は日本であまり見ないので、羨ましく思った。村という一つ共同体で生活する彼らは、互いの関係を大切にし、助け合って暮らしていた。最初は日本との生活様式の差に少し戸惑ったが、村のこうした温かい人々に囲まれて、毎日が幸せだった。技術面では圧倒的に遅れているが、一方で日本人が忘れかけている親密な地域性に触れることができた。

シティに出てみると、ファームほど原始的な生活ではなくなった。道路も整備されており、車が行き交う。しかし、家庭に洗濯機などなく、全て手洗いだった。またシャワーがあるのかと思いきややはり蛇口から出てくる水をバケツに溜めて流す方式だった。またトイレも水洗ではない。フィリピン人はどうやら朝にお風呂に入るらしい。そして濡れた髪のままで学校に向かう。ドライヤーというものがなかった。

私は今回初めて、途上国と呼ばれる国に行った。そこでの暮らしはある意味新鮮であった。あまりにも便利な社会に慣れてしまった私たちからすると、不自由に思うことも多々あったが、彼らはそれ以上の暮らしを求めているようではなかった。なぜなら彼らは幸せに生きているからだ。私は今回のプログラムで、便利な暮らしがあるからといって、それが必ずしも幸せにつながるのではないと感じた。改めて人とのつながりがいかに大切であるか学んだ。

「Ex.に参加して」

京都支部 同志社女子大学1年

菱刈 真衣

私がフィリピンに行って、英語を喋りたいという気持ちがより強くなりました。私はほとんど英語を話せない状態でフィリピン Ex.に申し込んだのですが、フィリピンに実際に行って、英語を上手く話せない、聞き取れない状態で異国の人々と交流することはとても難しいし、自分の思いをちゃんと英語に出来ない、相手の言っていることがふんわりとしか分からない、という状況にぶつかりました。もちろん、言葉が完全でなくても、分かり合おうとする気持ちを持つことで補える場面もたくさんありましたが、やはり英語を話すことが出来たら、ラサール大学の学生とももっとたくさんのお話が出来たのではないかと思います。日本での生活をしていて、日本語しか使わない状況で英語を話せるようになりたいと思っても、実際に行動に移せない自分がいました。しかし、今回の体験を通して英語に真剣に向かい合おうと思うことが出来ました。また、わたしの拙い英語を一生懸命理解しようとしてくれた、聞き取れない場面で何回も話してくれた、簡単な単語に変えて私が理解できるようにしてくれた、フィリピンの方々には感謝の気持ちでいっぱいです。

「フィリピン人の国民性」

岡山支部 岡山大学2年

濱口 瞳

今回、Ex.でフィリピンを訪れて感じたのは、フィリピンの人たちが明るく陽気で温かい人たちだったということです。フィリピンでは、食事の回数が多かったけどそれは、みんなと一緒に過ごしたいから食事の回数が多い、ということを知りました。日本では個食だったり家族がそろって食事をとらない家庭もある中で、そういう理由があることを知りいいなあと思いました。またフィリピンの人たちは、もてなしの気持ちを大事にしているということを事前に知ってはいましたが、ファームステイではそれを実感しました。ステイ先の食事ではチキンがよくでてきて、フィリピンではチキンが定番なのかと思っていました。しかし、カルロからフィリピンでは誰かをもてなす時に高価である肉を用意しようとする、そして彼らが用意しやすい肉がチキンなのだ、と聞き、もてなされていることに気づきました。たしかにステイ先の子どもたちは肉をよって食べていて、そのことを改めて感じました。食事の時間以外でも、お腹は空いてないか聞いてくれたりスナックを用意してくれたたり本当に優しく気を配ってくれました。それくらいフィリピンの人たちは温かく接してくれました。ファーム最終日には、私の名前が入ったブレズレットや、手紙を渡してくれました。ほんとにびっくりしてその優しさがとても嬉しかったのを覚えています。

大学生との交流では、また新たな発見がありました。それは簡単にいえば、みんなが仲が良いということです。本当に“みんな”が、仲がよかったです。フィリピンでは、ゲイの人がよくいましたが、ゲイの人も含め男女関係なく仲が良かったです。日本では、ゲイのような人に対して偏見や差別意識を持つ人もいますが、フィリピンではそういったことは感じられなくて、いいなあーと見ていて思いました。ファームにもゲイの男の子がいましたが、周りの子どもたちも全く気にしてなくて(heではなく sheと呼んでた)日本との違いを感じました。ファームの子どもたちもそうですが大学生は明るくて話しやすく個性がすぐに打ち解けることができました。大学生と交流しているうちにとりあえず何か話そうという気持ちになれてコミュニケーションがとりやすかったです。

このフィリピン Ex.と通してフィリピーノの優しさや明るさにふれ、学ぶべきことが多くあったように思います。約2週間のうちにたくさんのフィリピーノに出会い、いろんな話をしましたがこれらの経験は自分にとってかけがえのないものです。ありがとう！

「フィリピンの国民性」

岡山支部 ノートルダム清心女子大学1年

垣見 遙

私が Ex.に参加した理由の1つは、発展途上国の生活を知りたかったからである。出発前のフィリピンについての知識は治安の悪さや、伝染病、疫病の話を知ったことのある程度しか無かったので、楽しみと同時に正直少し不安だった。しかし、あの2週間で私の中でフィリピンと“発展途上国”のイメージは大きく変わった。実際のフィリピンは、人々の優しさと笑顔であふれていた。

ファームでは、どこに行く時も必ず数人の子供が私の手を引いて連れて行ってくれたし、ママが食べても食べても食べ物を出し続けてくれたおかげで、私は常におなかがいっぱいだった。そして何より、あそこで出会った子供たちの笑顔と、ファームの教会でお祈りが開かれたときに子供たちが、“あなたが幸せになれますように”と私たち全員の頬にキスして回ってくれたことは一生忘れられない。最初は何が始まったのかと思ったが、カルロに意味を聞いて私は泣きそうになるほど感動した。一方で、ファームでも生活状態は日本の生活とはかけ離れていた。いつ捨てられたか分からない、土に埋まった大量のお菓子のごみを見たときも、ママが木に火をつけて料理をするのを見たときも、自分で水をかけてトイレを流したときも、驚き、なぜか申し訳ない気持ちになったが、なにより生活排水が全て流れる川に、「川のお風呂に入っておいで」と言われたときは本当にとまどった。しかし、それでも常に笑顔でいるファームの人々を見て、必ずしも“裕福＝幸せ”とは限らないとはっきり分かったし、幸せとは何なのか考えさせられる。

一方でシティでのステイ先は日本とあまり大きな違いを感じなかった。もちろん挙げていくと違いはたくさんあるが、皆立派な車を持っていたし、私の家のテレビよりずっと大きいテレビを持っていた。ただ、私たちのファームであった silay とシティとの距離はあまり無かったにも関わらず、生活にこんなにも差があることに疑問を感じた。また、シティでは人と人との距離が非常に近かった。皆男女関係なく肩を組んだり、ジプシーで運転手さんと仲良く喋ったり、私のホストはジプシーでもタクシーでもスーパーでも行く先々で私を紹介していた。だからこそ DMI の学生とも短期間でこんなに仲良くなれたのだと思うが、“出会った人は皆友達”というような考えを持っているようだった。

この2週間、私は常に何かを学んでいた。フィリピン Ex.を終えた今、私のフィリピンに対するイメージは 180 度変わったのではないと思う。だからこそ、日本人がフィリピンに対してあまり良いイメージをもっていることは本当にもったいないし、残念に思う。今回フィリピンで学んだことを生かし、もっといろんな世界を見てみたいと感じている。もちろん、また近いうちにフィリピンを訪れたい。

《必要なものリスト》

必需品	便利品
・クロックス、ビーチサンダル	・ビニール袋
・着替え	・ハンガー
・虫よけ、かゆみ止め	・カーディガン
・帽子	・汗拭きシート
・薬	・お手拭シート
・ホストへのお土産(2家族分)	・レターセット
・水着	・子供が喜びそうなおもちゃ (折り紙、シャボン玉等)
・筆記用具	
・洗面用具	
・雨具	
・ポケットマネー	

《改善点》

- ・ファームでの小学校訪問のとき、子どもの数が予想外に多くて、プレゼント用の皆のお菓子をかき集めても足りなかった。
- ・プログラム終了時間がなかなか分からず、帰りの飛行機のチケットが期限内に買えなかった。

《編集後記》

岡山支部 ノートルダム清心女子大学 1年

垣見 遙

報告書を作成していると、フィリピン Ex.での 10 日間がまるで昨日のことにように思い出される。10 日間を一緒に過ごした 15 人の日本人メンバーそれぞれが、同じ場所で同じ時間を過ごしていても感じるものが違っていたり、私の知らないことを教わっていたりする。皆がいかに充実した時間を過ごしていたのか、改めて感じる事ができた。

この Ex.を通して私たちはそれぞれたくさんものを得たが、私はなにより「人」を得ることができたのではないと思う。10 日間、ずっとそばにいて私たちを笑わせ、たくさんことを教えてくれたカルロ。マニラ観光のために集まってくれたボランティアの方々。いつも私たちを気遣ってくれたファームの皆。フィリピンの学生の生活を教えてくれた DMI の学生たち。そしてなにより、10 日間を一緒に過ごした 15 人の日本人メンバーたち。特に日本人メンバーは、初めて会ったときには正直こんなに仲良くなれると思っていたが、今ではふと会いたくなるほどの存在だ。私はフィリピンでフェアウェルパーティーがあるたびに別れが惜しくて泣いた。ファームでもシティでも最後に空港でカルロと別れるときも、ほとんど皆が泣いていたように思う。それだけ私たちはフィリピーノに親切にしてもらい、たくさんの人と貴重な思い出を作ることができた。フィリピン Ex.に参加できて本当に良かったと心から思う。フィリピン Ex.に関わってくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいだ。これから、この Ex.で学んだことを忘れず生活していきたい。

発行元 International Student Association (日本国際学生協会)

発刊日 2014 年 4 月 21 日

編集者名 城 見幸

垣見 遙

